

北欧における高齢者への図書館サービス

—デンマークを中心に—

高 島 涼 子

はじめに

筆者は1997年8月31日から9月6日までコペンハーゲンに滞在し、国際図書館協会連盟 (International Federation of Library Associations and Institutions : IFLA) コペンハーゲン大会に出席する機会を得た。日程中9月4日には三つの公立図書館を見学する図書館ツアーのプログラムが組まれており参加することができた。本稿はその際に得た資料、案内にあたった司書の説明およびレセプションでの応答を主な資料としている。

筆者の関心は主に高齢者へのサービスにあるので、まず、高齢者への「特別なサービス」(special service)を提供しているかどうかたずねたところ、“No”という返事が返ってきたので、あわててどんなサービスをしているかという質問に変えて、ようやく宅配サービスや大活字本、トーキング・ブックの収集といった答を得ることができた。デンマークでもスウェーデン(一日のみコペンハーゲンから船で約40分の対岸にあるマルメ Malmö 市を訪問、新築のマルメ市立図書館を見学した)でも同じ質問をしたが返ってくる答も同じであった。

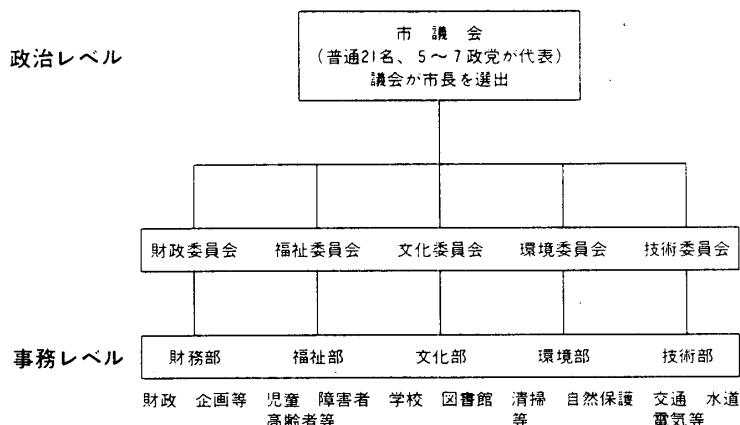
筆者にはこのやりとりには重大な意味があるように思われた。その意味するところが本稿執筆の動機となった。それは、高齢者へのサービスは決して「特別な」事ではないという考えがあたりまえに存在しているという事を意味するからである。図書館に来ることのできない人には自宅まで資料を届けるということは特別なサービスではないということの意味する。このことに気づかされたとき、筆者は改めて小さな国土と少ない人口でありながら、デンマークという国のありよう、国の政策、住民の生活態度に目を向けざるを得なかった。

以下に簡単にデンマークの概要を述べる。国土は43,100km²、ユトランド半島と400余りの島からなっている。九州とほぼ同じ広さである。首都のコペンハーゲンはシェラン (英語名は Zealand) 島にある。人口は約530万人、立憲君主制をとっており、国民の大多数はプロテスタントの福音ルター派に属している。行政は、コペンハーゲン市 (City of Copenhagen)、フレデリクスボー区 (borough of Frederiksberg) と14のカウンティによっておこなわれ、14のカウンティに273の地方自治体がある。もっとも住民に近い地方自治体が社会福祉や教育の中心組織となっている。図書館の主要な設置母体も地方自治体である。1970年に行政組織を大幅に改訂、公共サービスを提供しやすいように各地方自治体の人口を5,000人以上とし、その権限を強めた。行政は、政府—カウンティー—地方自治体の三者から成っている。現在5,000人以下の自治体が12、15,000人以下が165、最大の自治体はコペンハーゲンで、475,000人である。このような規模の違いはまたそれぞれの自治体の課題への取り組み方の違いを意味している。1973年からEUの一員

高 島 涼 子

となっており、北欧五カ国（デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、アイスランド）は労働市場を開放し、旅行の際にパスポートは不要である。主要な産業は農業と工業であり、それぞれの従事者は、農業が人口の5%、工業が27%である。両者とも高度に合理化され、生産品を輸出している。貧富の差は少なく、生活水準は高い。公用語はデンマーク語で、45歳以下の国民は大多数英語を不自由なく使う。⁽¹⁾

図1 典型的なデンマークの自治体（市）の行政組織⁽²⁾



本稿ではまず、デンマークの公立図書館全体について述べ、さらに筆者が訪れた公立図書館の高齢者サービスについて個々に述べ、次にそれらのサービスの基盤となっている「デンマーク公立図書館法」について述べる。最後に高齢者福祉について簡単に触れる。

1. デンマークの公立図書館

『デンマークにおける図書館システム』（The Library System in Denmark）⁽³⁾は、「図書館は市民にとってもっとも重要な公共サービスの一つである。」という文から始まっている。

(p.9) この中で繰り返し述べられていることは、1. 公立図書館の利用は無料であること、2. デンマークに住むすべての人々——図書館に来ることのできない人々を当然含む——にサービスを提供する義務を公立図書館は負っていること、の2点である。また、公立図書館のサービスには、年齢、教育程度、職業等によっていかなる条件も制限も加えられてはならないとされている。1964年法以来公立図書館法はすべての自治体に図書館の設置を義務づけている。前述した1970年の地方自治体の改革以来図書館を設置していない自治体は皆無となった。これらの原則は詰まるところ、すべての人々に平等なサービスを提供する（それぞれ必要としているサービスを一人一人に提供するという意味で）というデンマーク公立図書館の目的に集約される。

このような公立図書館観は以下の文化大臣の議会における発言からもうかがえる。

公立図書館法はデンマークの文化政策の道しるべである。公立図書館は国民の情報や経験（experiences）への平等なアクセスのための非常に重要な施設である。このことを最大可能にする状況を創出することが主要な文化的課題である。⁽⁴⁾

等しいサービスという目的を実現させるには居住地が大きな問題となる。どこに住んでいよう

が等しく図書館を利用するためには分館が必要となる。1996年末現在、デンマークでは530万人の国民に対して、250の公立図書館、843のサービス拠点、57の移動図書館がサービスを提供している。分館設置については現在も1964年法のまま、義務づけられてもいないし、具体的なガイドラインもないが、1970年の改革以来大幅に増加している。図書館の経費は、最高額コペンハーゲン郊外地区の年間一人当たり754DKr（デンマーク・クローネ、1DKrは約20円）から最低額農村地区の26DKrまでさまざまである。

公立図書館の利用状況は、1996年で、全国平均で一人当たり年間貸出冊数13.7冊となっている。これに視聴覚資料を加えると、年間16点となる。

また、アウトリーチについては、1983年の図書館法改訂で、図書館に来ることのできない人々、子供であれ成人であれ、へのサービスが努力目標としてあげられた。義務として課せられてはいないが、どのような形であれ全公立図書館が実践している。子供の施設や高齢者用施設、心身障害者の自宅、刑務所等に「図書館が出かけていく」。近年は利用者を図書館に連れて来る方法に変わった。「図書館は[利用者を]集める」のである。この方法は来館できる利用者と同じ資料選択の機会を提供できる。合計すると、1996年には1万人の外出不可能の市民を訪問し、7千人の録音新聞（talking newspaper）⁽⁵⁾読者を数えている。また、60の病院と1,100のケア施設にサービスを提供している。高齢者以外では子ども向けの6,200の施設や50の刑務所にもサービスを提供している。⁽⁶⁾

デンマークは障害を持つ人々に「ノーマリゼーション」の考えを最初に打ち出し（デンマーク知的障害者協会会長ニルス・エリク・バンクーミケルセン Neils Erik Bank-Mikkelsen による）、その考えを実践している国として有名である。デンマークの知的障害者サービスを規定した1959年法は、「ノーマリゼーション」の考え方として「知的障害者のために可能な限りノーマルな生活状態に近い生活を創造する」という精神を基礎にしている。

その目的は、障害のある人ひとりひとりの人権を認め、取り巻いている環境条件を変えることによって、生活状況を、障害のない人の生活と可能なかぎり同じにして、『共に生きる社会』を実現しようとするものである。⁽⁷⁾

こうした伝統と背景を持つ国であることが上記のような図書館サービスからも知ることができる。

1. 1 ヘルシンゲア中央図書館（The Main Library of Helsingør）

1971年に設立されたこの図書館は、またフレデリクスボー・カウンティ（Frederiksborg County）のカウンティ・ライブラリーでもある。カウンティ・ライブラリーとしては18の自治体をサービス対象としている。中央図書館のサービス対象人口は26,000人、自治体全体の人口は58,000人である。

アウトリーチ・サービスの高齢者および障害者を対象としたものとしては、8ホーム・デイセンター、180戸への宅配、140点の録音新聞の提供、リハビリ病院、他に子供用デイセンターや刑

高 島 涼 子

務所にサービスを提供している。ヘルシンゲア市全体（The Libraries of Helsingør Municipality）としては、

	蔵 書	貸 出 数	ト ー キ ン グ ブ ッ ク	貸 出 数
成 人 用	319,283	539,004	9,621	44,302
子 供 用	169,958	396,939	7,527	18,542
年間一人当たり貸出回数	21.6			

新聞・逐次刊行物 1995点

といった状況である。⁽⁸⁾

1. 2 エルシノア図書館（Elsinore Municipality's Libraries）

エルシノア市は、中世にはデンマークスウェーデン間を航行する船はすべて停泊する町で、1420年から1857年まで通行税をとったという。1480年頃には最初に聖書をデンマーク語に訳したクリスチャン・ペデルセン（Christiern Pedersen）がこの町で誕生している。彼は現在デンマーク語の父と呼ばれている。16世紀には『ハムレット』の舞台として有名になったクロンボー城が築かれ、中世の面影を残している町である。

この町の1993年当時の図書館利用状況は以下の通りである。

全資料点数	556,016
年間貸出点数	1,369,689
年間一人当たり貸出回数	24

エルシノア市は公立図書館サービスについて次のように謳っている。

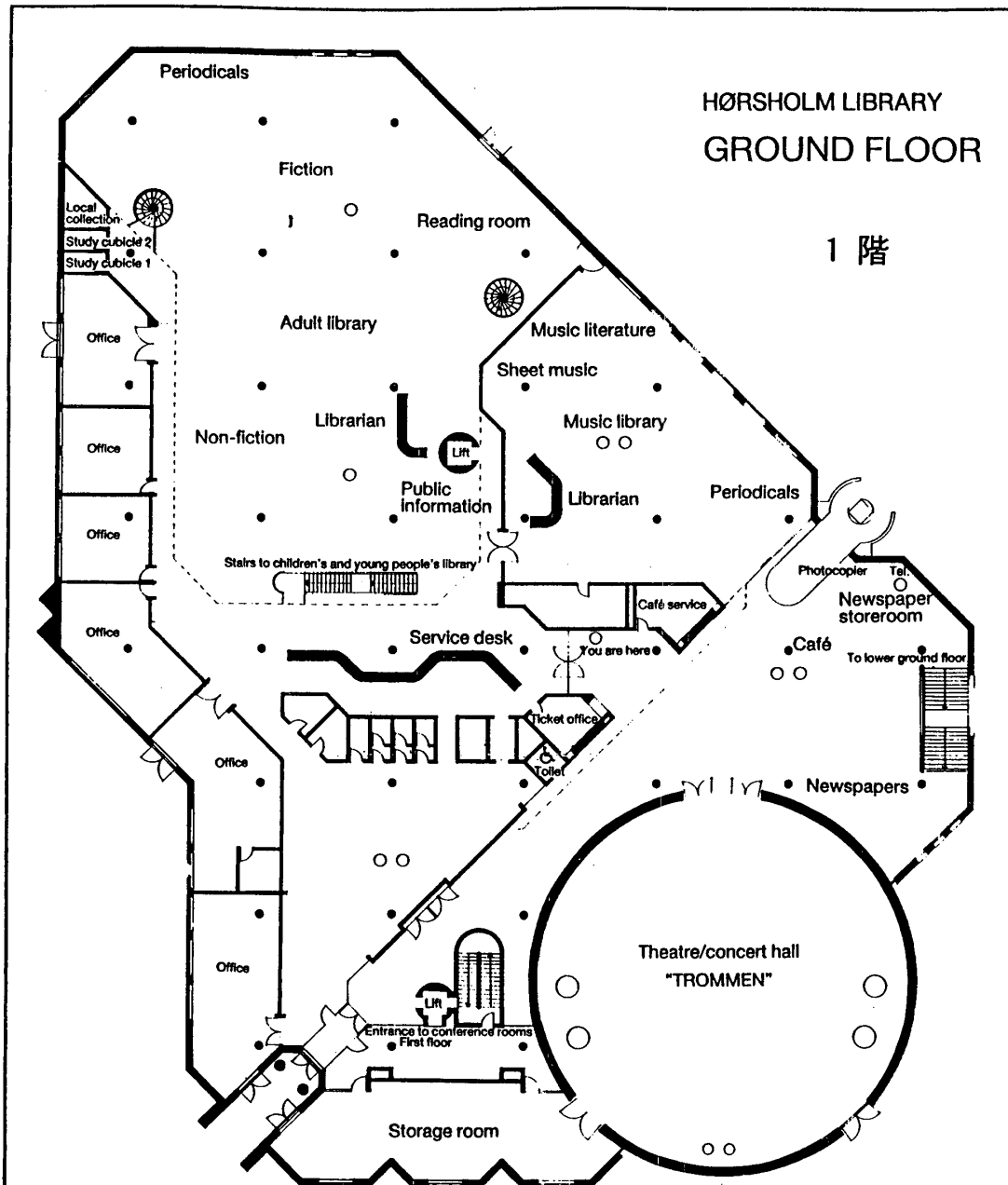
公立図書館法によれば、デンマークの図書館は、図書およびその他の適切な（suitable）資料を無料で全員に提供することによって、情報、教育、および文化活動の伝播を奨励することを要求されている。公立図書館のサービスは自治体住民のあらゆるグループを対象としなければならない。子供、成人、デンマーク国民と同様な移民や難民を。従って公立図書館は図書館以外の、個々の自治体内の、各種のクラブ、協会、グループ、学校、デイ・ケアおよび社会施設、企業と協力する。また、子供と成人の為に催し物や展示会も開催される。

アウトリーチ・サービスとしては、来館するのが困難な人のための宅配サービス、視覚障害者や高齢者、読書障害者への録音新聞の提供などがあげられる。1994年現在人口56,785人中67歳以上人口が増加しており、1993年には高齢者用住宅を49戸新築しており、将来的にはさらに139戸の新築を予定している。⁽⁹⁾

1. 3 ヘルショルム図書館 (Hørsholm Library)

総資料点数206,498点の比較的こじんまりとした図書館であるが、人口23,400人の自治体にしては際立った施設を持っている。図書館とコンサート・ホールおよび劇場を合体させたユニークな建物の図書館であった。この図書館も宅配サービスをおこなっている。

見取り図⁽¹⁰⁾



以上三つの図書館は前述したように経費の面からは最も豊かなコペンハーゲン郊外に位置しており、どれも国内で平均以上のサービスを実施しているいわば優良図書館である。これはIFLAでの見学ツアーで、世界中から集まった司書に見せるために選ばれた図書館であることを考慮すれば当然である。しかしそれでもこれだけの水準の図書館を見学できたことは大きな喜びであった。

2. デンマーク公立図書館法 (Danish Public Libraries Act) ⁽¹¹⁾

18世紀啓蒙時代に始まった図書館は、19世紀に義務教育の設置により公立学校制度が整えられたこともあって各地に広がっていった。この広がりを促進したのが、1890年代のアメリカ合衆国における図書館のデンマークへの紹介であった。そしてデンマークで初めて図書館法が採択されたのが1920年、その後たびたび改訂されているが、その中でも1964年法は現代デンマーク公立図書館の基礎を形成した画期的な改訂であった。現在の図書館法は1993年改訂のものである。次の6部からなっている。1. 公立図書館の目的および資料の選択、2. 地域図書館の組織、3. カウンティ・ライブラリー、4. 公立図書館に関連する事項の政府の役割、5. 特別な目的のための政府援助、6. 利用者に料金を課する場合の特定権限。さらにこの公立図書館法と並立して1994年公立図書館に関する政令 (The Minister Order on Public Libraries of 1994) が設けられている。⁽¹²⁾

この図書館法のなかで高齢者に関する箇所を抜粋する。

第1章 公立図書館の目的は、図書およびその他の適切な資料を無料で提供することにより、知識や教育、文化をより広めることにある。

第2章 公立図書館は、自ら来館することのできない子供および成人に図書館サービスを確認としたものとするように努める。

第5章 3) 図書館はサービス対象地域の広さおよびその特性によって必要なときは分館を設置するよう努力する。

第6章 公立図書館の長は専門の資格を持ったものである。

第12章 公立図書館に属する次の事柄について政府がその経費を負担する。

2) 読書が困難な人々のためのトーキング・ブック等のための特別上部組織

第13章 2) デンマーク視覚障害者図書館 (The Danish Library for the Blind) は、障害のある利用者にトーキング・ブックや逐次刊行物を提供する主なセンターとして機能する。また、国内外の適切な録音資料を公立図書館に貸し出すセンターとなる。

政令では、録音新聞に対しての政府補助についてや、図書とトーキング・ブックを同等に扱うなどの点について言及されている。なお、これらの資料に関する著作権の問題を解決しているのは、スウェーデンとデンマークの二国のみである。

3. デンマークの高齢者福祉について

北欧、特にデンマークの社会福祉制度の充実は、日本でも数多くの著作によって紹介、解説されている。⁽¹³⁾ 改めて述べる必要はないと思われるが、一体何がデンマークという国の社会をそのように築き上げさせたのかという点についてだけは触れておきたい。この点こそが、図書館でいえば高齢者へのサービスを推進する鍵となるからである。

いくつかの著作の中で共通して指摘されているのが、「富の再分配」という点である。

資本主義経済のもとで、高い生産性を維持するには、強い競争原理が働かねばならない。この原理は通常優勝劣敗、弱肉強食の結果をもたらす。そうすると、社会的弱者には大変住みづらい。しかし、デンマークでは、強力かつ合理的な所得の再分配システムと、人々の高い政治的関心によって、世界最高水準の障害者や老人のための社会サービスが実現されている。

それを可能にしているのは、根強い平等意識であり、歴史的に形成された「草の根民主主義」の伝統であるらしい。デンマークが世界の先進資本主義国家に問うているものは、我々の予想をはるかに超えるものだった。この「小さい」国に学ぶべきものは、じつに「大きい」のではないだろうか。⁽¹⁴⁾

なぜこの「富の再分配」が可能になったかということが次に問題になる。まず女性の就労が盛んになったことがあげられる。デンマークでも高齢者福祉対策が本格的に変わった1970年代までは女性が高齢者ケアの担い手であった。その女性たちが働くことによって高齢者ケアの問題が浮上したのである。この時点でデンマークは女性たちが安心して働くことができる環境を作る道を選んだのである。さらに高齢者や障害者を社会的弱者のままにはせず、社会の一員と見なす社会的土壌があげられる。その一端が次のデンマーク福祉大臣が来日したときの言葉に見られる。

日本とデンマークの違いは、ものの配分の仕方、金持ちと低所得者に対しての富の配分の仕方が非常に違うところにあるんでしょう。おそらく政治的にそうなんでしょう。……私の考えでは、豊かさというのは、その社会の一番弱い人々を、どういうふうに扱うかということに最もよく現れると思っています。⁽¹⁵⁾

デンマークの人間一人一人を見つめる豊かな福祉の思想は、単なる制度の違いや政治の仕組みの違いを超えて、はるかに深い経済思想からきている。

おわりに

国が違って、人が生きるのに必要な要素に変わりはないだろう。しかし実際には、その国に住む一人ひとりの可能性と生き方が、その国の価値観に左右される。女性が家庭を持って子供を産み育てながらも、仕事を持って生活したいと思う。障害をもった人も、年老いた人も、自分の家でふつうに暮らしていきたいと願う——日本では大変な努力を要することが、ここデンマークでは当たり前を実現する。⁽¹⁶⁾

何気なく使用する「当たり前」や「ふつう」ということばの意味を改めて考えさせられたことが本稿執筆の動機であった。そしてまた改めて日本における高齢者への図書館サービス、ひいては社会の風潮とデンマークのそれとを比較せずにはおられない。デンマークでは当たり前の資料の宅配サービス、日本では障害者へのサービスも含めてほんの数館、トーキング・ブックを図書と同じように扱い、録音新聞まであるデンマーク、大活字本や録音図書の生産さえ追いつかない日本、……。

高 島 涼 子

筆者が訪れたスウェーデン、マルメ市立図書館の司書は、宅配サービスについて次のように説明してくれた。

宅配にいくのは、司書ではなく、図書館の雑用係[のようなもので、館内の案内や警備にあたり、宅配や相互貸借のために図書館間を回る運転手の仕事をしたりする]で、司書から、利用者一人一人について、ベルを鳴らしてから玄関に来るまで時間がかかるから長く待つように、とか、本を持つことができない、とかいった状況を知らされている。

司書は電話や最初の訪問で、利用者一人一人について関心分野、大活字本の使用、健康状態などを調査し、それぞれにカードを作成している。

こうした社会が実現するためには、近い将来4人に1人が65歳以上という超高齢社会となる日本は重要な岐路に今立っており、どの道を選択するのか市民一人一人が決断を迫られている。

参 考 文 献

注

- 1) デンマークの概要については、*The Library System in Denmark*, by Jørgen Svane-Mikkelsen and the Royal School of Library and Information Science. Copenhagen, Royal School of Library and Information Science, 1997. pp.9-14. "The Country, the People and the Libraries" を参考にした。
- 2) 『デンマーク・スウェーデンで見た在宅福祉』p.20 注12) 参照。
- 3) *The Library System in Denmark*, op. cit.
- 4) *Ibid.*, p.16 1993年法が議会に提案された時の文化大臣の演説。
- 5) 「録音新聞」は筆者がとりあえず "talking newspaper" の訳とした言葉である。talking booksと同様、新聞をテープに吹きこんだものである。デンマークではtalking booksは1950年代から使用され始め、デンマーク視覚障害者図書館から郵送料無しで直接借りることができる。もちろん公立図書館を通して借りることも可能である。同図書館は独自の印刷局と音響スタジオ及び音響設備を持っており、商業ベースにのらないものや市販品で絶版になったものを作成している。talking booksはデンマークでも後に訪れたロンドンの公立図書館でも多く配架されていた。
- 6) *The Library System in Denmark*, op. cit., pp.15-28 "Public Libraries" の章を参照。
- 7) 『「ノーマリゼーションの父」N・E・バンクーミケルセン その生涯と思想』花村春樹訳・著(福祉BOOKS11) ミネルヴァ書房 1994年 p.12 ほかにノーマリゼーションに関しては、『ノーマリゼーションへの道』江草安彦著 改訂増補版 全国社会福祉協議会 1988年、『ノーマリゼーション 社会福祉サービスの本質』ヴォルフ・ヴォルフエンスベルガー著 中園康夫、清水貞夫訳 学苑社 1982年などの資料を参照。
- 8) "Welcome to our IFLA guests," by the Libraries of Helshingør Municipality 参照。
- 9) "Elsinore - a long and exciting history," by CULTURAL AND RECREATIONAL ADMINISTRATION 参照。
- 10) "HORSHOLM LIBRARY" 参照。7), 8) の資料と共に三図書館見学時に配布された資料である。
- 11) Danish Public Libraries Act, published by Danish National Library Authority, Copenhagen, 1994.
- 12) *The Library System in Denmark*, op. cit., pp.15-17.
- 13) 『ヨーロッパの高齢化と福祉改革』アラン・ウォーカー著 渡辺雅男、渡辺景子訳(MINERVA福祉ライブラリー 18) ミネルヴァ書房 1997年
『デンマークに学ぶ豊かな老後』岡本祐三著 朝日新聞社 1990年
『デンマーク・スウェーデンで見た在宅福祉 福祉の専門家が複眼で見た福祉大国の現場』小川政亮[ほか]著 萌文社 発売ささら書房 1992年『スウェーデン人はいま幸せか』訓覇法子著(NHKブック

ス) 日本放送出版協会 1991年

『ヨーロッパ・老いの明け暮れ』河島修著 日本放送出版協会 1993年

14) 『デンマークに学ぶ豊かな老後』前傾 p.192

15) 同上

16) 『デンマーク四季暦』木下澄代, 深井せつ子著 東京書籍 1997年 p.2